

<全体講評>

事例Ⅰから事例Ⅳ4つの事例とも、試験問題として対応が難しい事例でした。「難しかった」という印象を持った受験者が多かったと思われます。ただ、結果的に約2割が合格するということを前提に考えると、「大事故を連発しなければよい」という点は変わっていません。

それぞれの事例について、簡単に特徴を整理してみます。

事例Ⅰは、まったく何を解答してよいかわからないという問題はなかったと思われます。しかし、要求の抽象度がかなり高い問題が多く、かつ、事例Ⅰにしては問題本文の記述量が多いため、解答を組み立てる根拠の特定が難しいです。比較的得点しやすい第2問でそれなりに得点すること、残りの問題は、無理やり解答内容を絞りこむことをせず、複数の内容で構成し得点を積み上げていく対応ができれば十分だと思います。

事例Ⅱは、昨年の形式をさらに極端にしたかたちになりました。採点基準によってはかなり得点のばらつきが大きくなる可能性があります。第3問では、少なくとも数値を正確に表現できていること（結論はともかく）、第2問、第4問は、要求をしっかりと解釈し、あくまで問題本文中に示された根拠を最優先し、そこから解答を組み立てる慎重な対応をしたかどうかのポイントになると思われます。

事例Ⅲは、制限時間内に問題本文に示されている内容を要求に合わせて正確に整理・理解すること難しいです。また、制限字数160字の問題が2つあり編集にも時間がかかります。第1問、第2問を早めの時間帯に片付けて、ヘビーな第3問、第4問にじっくり取り組み、ある程度の内容の解答を仕上げることであれば、十分であったと思われます。

事例Ⅳは、ここ2,3年続いた形式・内容でビックリするということがない分、ぱっと見対応しやすい印象ですが、得点を伸ばすのは難しい問題（配点）構成になっています。特に第3問では、問題の理解を正確に行わないと、個別固定費の扱いを誤り（設問2）（設問3）は失点する可能性が高いです。得点可能性の高い第1問と第4問の配点がもう少し高ければ全体の印象もかなりちがったものになったと思われます。